神聖ローマニア帝国の繁栄と没落

イエニチェリ軍団

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

長年西大陸を収めてきた神聖ローマニア帝国

前皇帝の領土拡大政策により、財政難、治安悪化などの問題をかかえた帝国

そんな中、次期皇帝に選ばれたのはまだ幼い子供だった。

帝国の危機を救うために後の世で『恐怖公』と恐れられた男が動く

目次

皇帝戴冠 1
恐怖公 6
イタリア戦争 13
外交改革 19
ユトレヒト同盟 25
帝国の歴史 31

皇帝戴冠

神聖ローマニア帝国

皇紀９６２年にローマ教皇ヨハネス１２世により戴冠されたオットー一世からつづく帝国で長い間、西大陸を収めてきた巨大な帝国である。皇帝カール４世時代に帝国の支配領地は急速に拡大し今までにないほどの繁栄をむかえていたが、度重なる戦争、戦争による財政難などという問題をかかえていた。

そんななか、カール４世病死　次期皇帝に選ばれたのはまだ幼いカール５世である。

神聖ローマニア帝国　内務省

「長官、長官!!、、、」

「どうした、さわがしい　またどこかで反乱でもおきたか?」

「いえ、違います。次期皇帝が決まりました。カール５世殿下です!!」

「馬鹿を言うな。カール殿下はまだ齢１２歳だぞ。誤報ではないのか?」

「いえ、確かな情報です。『全文官、武官は皇帝陛下の祝賀パーティに出席せよ』との命令も来ています。」

「ローマ教会は何をしている。前皇帝殿下が残した問題を解決していくには幼すぎる。これでは最悪の場合国が　崩壊していまうかもしれんではないか、、」
頭を抱えながらその男は席を立ち黒色のコート来て長官室をでる。
たとえ幼い子供にしても皇帝殿下は皇帝殿下である。自分は国のため、皇帝殿下のために、忠義を尽くすと　誓っていた。
後にこの男は、『恐怖公』『帝国の番人』と恐れられた男である。

内務省長官及び親衛隊長官　ラインハルト・ハイドリヒである。

応接の間
新たな皇帝陛下誕生を祝うために続々と文官　武官があつまっていた。
「おー、これはこれはハイドリヒ長官息災ですかな。」
「これは、ヨハネス大臣。私はいつも通りでありますな。」
「それは良いことですな。変わらないことが一番安全ですからな。それよりもまさかカール殿下が次期皇帝にえらばれるとは、、」
「ローマ教会はなぜカール殿下をお選びになられたのですか?まだ幼いおかたです

ぞ。」

「おそらくブランデンブルク大臣の策略でしょう。」

ブランデンブルク大臣

前皇帝時代に皇帝補佐までに上り詰めた男だが、実のところ国の金を横領し、やりたい放題をしている。という噂がある。内務省にもよく報告書がくるが、確たる証拠がないため野放しにされている。

「ブランデンブルク大臣はローマ教会の十二選帝侯とも仲がよいと聞いています。おそらく、、」

十二選帝侯

ローマ教会におけるトップ１２人のことを指す。事実上ローマ教会を裏から操っている。

「皇帝殿下のおなりぃ～」

ドアが開き皇帝殿下がおいでになられた。玉座に座る皇帝殿下はぎこちないようすであられた。

「皆の者、面を上げよ」

幼いが威厳のある声で臣下たちに告げる。

「皆　世のために集まってくれて余はうれしい。これから余は神聖ローマニア帝国皇

帝としてこの国を治めていくが、私はまだ幼い。　ゆえに私はブランデンブルク大臣を補佐役としてこの国を治めていこうと思う」

「「「!!!」」」

「皆の者これからもよろしく頼む。」

皇帝陛下のあいさつが終わるとパーティが開始された。陽気な音楽に豪華な食事を大臣たちは楽しんでた。

「皇帝陛下、内務省長官のハイドリヒ閣下がお見えです。」

「おぉハイドリヒ、元気か?」

「はい。陛下もお元気そうで何よりです。」

「昔　おぬしにはよく遊んでもらったな。あの頃は楽しかったぞ。」

「わたくしも楽しゅうございました。これからも陛下を補佐してまいります。」

「流石は前皇帝陛下がお認めになられたお方ですな、わたくしブランデンブルクも貴殿には期待しておりますぞ。」

「えぇ。この国にむしばむ害虫を駆除するのが私の役目なのでね。誠心誠意に陛下に尽くしていく所存です。」

「、、、ほう。」

大臣とハイドリヒとの激しい火花が飛び散る。気まずい雰囲気を察したのか陛下が話を持ち出した。

「そ、それよりハイドリヒ。国内に多数存在するプロテスタントどもへの対処はどうだ?中東のイェニチェリ帝国の脅威が迫っている今、反乱など起こされてはこまるからな。」

「お任せください。反乱分子の摘発にもうすぐ取り掛かろうとしているところでございます。また中東のイェニチェリ帝国、西のフランソワ王国　東のツァーリ公国に私の手の者を忍ばせております。」

「流石だなハイドリヒ!、うむハイドリヒがいればこの国も安泰だな。大臣」

「、ええ　そうですなぁ」

「それでは失礼いたします。」

あの時　私はあの祝賀会で二つの大きな鷲をみた。片方は金色に光っており、片方は黒く光っていた。

ヨハネス著作の帝国回顧録より

恐怖公

内務省長官室

帝国の内務省長官のハイドリヒは机に積み上げられている報告書に目をとうしていた。

報告書の中には、数か所の村でプロテスタントたちが反乱を起こす準備をしているなどローマ教会の金の動きに怪しいところが存在するなど各種様々な報告が上がっていた。

「やはりプロテスタント共がやっかいだな。」

先代皇帝時代に財政難を解消するため皇帝はローマ教会と共同で『贖宥状』の販売を宣言した。この贖宥所は買えば今までの罪がなくなるという嘘をでっちあげ莫大な利益をあげていた。が、マルティン・タルーがこれに異論を唱え『９５箇条の抗議文』を教会に張り出した。その後、現在のカトリックのやり方に異議を唱えるものが続出し、新たにプロテスタントという宗派が誕生した。この者たちは幾度となく帝国に対し反乱を起こし先代皇帝殿下を苦しませ続けた。

「しかも肝心な贖宥所の利益の６割の行方が分からなくなっており、財政難解決には

至らなかったという。まったく先代皇帝殿下も厄介な問題を残しておいきになったもんだ。」

「長官　失礼します。フランソワ王国に潜入させているものから報告書が届きました」

そういってドアから入ってきたのはグレーの服をきた内務省職員であった。この内務省は先代皇帝に気に入られたハイドリヒが先代皇帝に頼んで新設した部署である。内務省のおかげで当時問題になっていた治安悪化を解決し、ハイドリヒの権限は大幅に拡大した。ハイドリヒ専用の軍隊『親衛隊』もその一つである。

「報告書によると、フランソワ王国のフランソワ一世が各地から兵士を徴兵しはじめていると。」

「、、、陛下のイタリア遠征の日はいつだ」

「4日後であります。」

「この報告書を陛下にお渡ししろ。もしかするとフランソワは陛下のイタリア遠征を邪魔する可能性がある、調査員を増やせもっと正確な情報を見つけるんだ」

「りょ、了解しました!!」

「後、ブランデンブルク大臣に例の件を実行に移すと伝えろ。」

「はっ」

２日後

大臣からの許可をもらったハイドリヒは国家警察であるゲシュタポを招集し、国内に潜む反乱分子の一斉摘発に踏み込んだ。

かねてより計画されていたが、陛下のイタリア遠征に合わせて実行することになっていた

ゲシュタポ　ハイドリヒが先代皇帝に頼んで創設したうちの一つで、国家への波乱分子の抹殺、治安維持などが主な任務であり、市民たちからは「死の軍隊」としておそれられている。

計画実行がハイドリヒから通達され、ゲシュタポたちはどくろの旗を掲げ、反乱分子が潜む村へと向かうのであった。

ある村

何気ない日々を送っていたその村はその日を境に地獄へと変化した。

ゲシュタポによる一斉摘発より村人たちは虐殺されていた。

「や、やめてくれ　わしは何も知らんやめ、『バンッ』」

「命だけは命だけは助けてくれ、頼む　なんでもす『バンッ』」

「おぎゃーおぎゃーお『バンッ』」
おぞましい虐殺が行われている中、少し離れたところに建てられたテントで部隊の隊長は報告を待っていた。
「隊長、今のところ計画どおりです。」
「反乱を企てていた者たちは捕まえたか？」
「はい、その他の村人たちは全員始末しました。」
「よろしい、おいお前この報告書をハイドリヒ閣下にお渡ししに行け」
「はっ」
その日、いくつもの村々が消えてなくなった。残っていたのは焦げた人の死体だけだったという

応接の間
「ハイドリヒよ、今回の任務ご苦労である。これで余も安心してイタリア遠征に行けるぞ。」
「ありがたき幸せでございます。陛下ですが、もう一つお耳に入れたきことが」
「フランソワ王国のことか、」
「はい、どうやら奴ら、今回の遠征途中に陛下を襲うつもりです。そして皇帝の座を手

に入れようと考えているそうです。」
「先代皇帝の残した問題の一つだな」
先代皇帝は領土拡大政策を推し進めるために戦争をし続けていた。そのおかげで周辺国との関係は最悪であり、特にフランソワ王国は神聖ローマニア帝国のことひどく憎んでいた。
「はぁ、、先代皇帝の領土拡大政策のせいだな」
「陛下　弱気になってはなりませんぞ。このブランデンブルク陛下の気持お察しいたしますぞ」
ハイドリヒは顔には表さなかったが、心の中ではあきれていた
なんせその領土拡大政策案を打ち出し実行に移すよう先代陛下に提案したのは誰であろうブランデンブルク大臣なのだから
この政策のおかげで国が疲弊し財政難になってしまったが、その責任をブランデンブルク大臣はほかの大臣に押し付け自分の政敵を血祭りにあげた。
「大臣、、ありがとう」
「陛下、此度の遠征　私ハイドリヒもお供してもよろしいですかな」
「何?!それは心強「それは困りますぞハイドリヒ長官」
「、、なぜですか大臣。」

「先ほどそなたの反乱分子摘発実行したところだ、そんな中そなたの親衛隊が遠征に参加したらどうなる」
なぜこんなに大臣が反対するのかというと、ハイドリヒの親衛隊は陛下ではなく、ハイドリヒに忠誠を誓っておりその他の内務省やゲシュタポもそうである。
ゆえにこれ以上ハイドリヒの権限が増えるのをどうしても阻止したいのだ。
大臣自身も何度か自分の仲間であった大臣たちがゲシュタポによって捕まるという経験があり、ハイドリヒを危険視していた。
「ハイドリヒ長官には国内安定に今は力を注ぐべきだと思いますがな。いかがですか陛下」
「う、うむ。そうだな　ハイドリヒすまんが今回はあきらめてくれ」
「承知いたしました。陛下。その代わりに、中東のイェニチェリ帝国の動きが怪しくなっております。ウィーン方面の守備を親衛隊に任せてもらってもよろしいですかな」
「うむ　認めよう。イェニチェリ帝国の脅威は今も増し続けておるしな、頼んだぞ」

そして
「これより、イタリア遠征を開始する!!全軍我につづけぇ!」

カール五世のもと約3万の兵がイタリアに向けて進撃した。

イタリア遠征　フランソワ王国がイタリアへの領土拡大を開始し、それを脅威と感じだカール5世は「教皇に謁見する」という理由でフランソワ王国を牽制しようとおこなった遠征。実のところカール5世はこの遠征に否定的だったがローマ教会から、フランソワ王国を牽制してほしいという頼みがあり、仕方なく遠征することを決めた。

イタリア戦争

カール５世率いるイタリア遠征軍は「教皇への謁見」という名目のフランソワ王国の牽制のため教皇領に向かって進軍していた。

北イタリア

カール５世は休憩のため軍を止め、休憩をしていた。

「陛下、休憩中すみません。現在の状況説明をしにまいりました」

皇帝でも齢１２歳の子供、カール５世は、眠たい目を覚まして、状況を聞いた。

「現在わが軍は、北イタリアを通過、明日の夕方には教皇領に着けるでしょう。」

「ふむ。そうか、よし日が昇り次第進軍を開始す「陛下!!陛下!!」

「ん?どうした?」

「本国のハイドリヒ長官から使者が来ております。なにやら緊急のようであります」

「なに?、、通せ。」

テントに黒色の服を着た親衛隊隊員が入ってきた。

「陛下、夜遅くに申し訳ございません。」
「よい。それで要件は?」
「は、ハイドリヒ長官からの伝言です。」
親衛隊隊員は手に持っていた封筒をカール5世に手渡した。封筒を開け中の手紙を読む
「、、、、なん、だと。」
手紙を読んだ瞬間カール5世の顔色が変わった。何かがおかしいと察した将軍たちはカール5世に問いかけた
「陛下、いかがなさいましたか?ハイドリヒ長官からはなんと、?」
「兵たちを起こせ!!戦闘準備だ!!」
「陛下! 何事ですか陛下!」
「来る、、、フランソワ王国が来る。奴らが攻めてくる」
「「??!!」」

フランソワ軍
フランソワ軍は北イタリアで休憩をとっているはずの神聖ローマニア帝国の軍隊を奇襲するために進軍していた。

「国王陛下、もうすぐカール5世の軍勢が見えてくるはずです」
「まだ我らの事には気づいていないだろう、このまま勝てば私が皇帝に、ふふふ、フハハハ」
「陛下ー!カール5世の軍は我らの存在に気づき迎撃態勢をとっております。」
「なっ、、ふ、まぁよい。それでカール5世はどのような人物であった。まぁ我よりは劣っているだろうがな」
「それが、どうやら皇帝はまだ齢12歳の子供だそうです。」
偵察の兵士が告げた瞬間、フランソワ1世は腹を抱えて笑い出した。
「ハハハハハ、、ハハハハ、、、ふざけるなぁ!!」
次の瞬間、王は偵察の兵士を軌り殺した
「へ、陛下、、落ち着いてください　陛下!!」
「なぜ皇帝が我ではなくそんなガキなのだ!!ふざけおって、」
「陛下、、」
「いいだろう、全軍きけぃ!!敵はカール5世ただ一人!!全軍攻撃開始ぃ!!」

神聖ローマニア帝国軍勢
「陛下!!フランソワ軍がつっこんで来ます!」

「全軍、迎撃準備!!敵を食い止めろ!!」
神聖ローマニア帝国軍３万　ＶＳ　フランソワ軍４万５千
世に言う「イタリア戦争」が始まった。

神聖ローマニア帝国内務省
北イタリアでローマニア帝国軍とフランソワ軍が激突　その情報はすぐに、内務省に届けられた。
「長官、、長官!、、長官!!」
「どうした、そんな焦って」
「北イタリアで、わが軍とフランソワ軍が激突、現在わが方劣勢のまま、戦闘が続いています」
「やはりか、待機していた親衛隊部隊を援軍に行かせろ。陛下をお守りするんだ。」
「はっ!!」

北イタリア

数に劣るローマニア帝国軍は数に勝るフランソワ軍に対抗していたが、少しずつ押されていった

「陛下、皇帝陛下。これ以上はもう持ちません。撤退を」

「く、、くそっ　て、撤「陛下ーー!!」

「陛下、援軍です！ハイドリヒ長官の親衛隊が援軍に参りましたぁ!!」

「ハイドリヒ、、、」

フランソワ軍

「国王陛下！敵の援軍です。」

「ええい、ちょこまかともうすこしでガキを仕留めれるんだ。攻撃しつづけろ！」

突如現れた親衛隊約3千は数は少ないが　ハイドリヒの元で鍛え上げられた兵士たちは、国民から徴兵されたフランソワ軍より、練度、士気、すべてにおいて勝っていた。

親衛隊

「隊長、敵が突っ込んできます。」

「ふん、突っ込むしか能がない奴らめ、射撃用意、、うてぇぇい！」

「国王陛下、、撤退を、撤退のご決断を」

「くそ、くそぉ、くそがぎぃぃぃぃぃがぁぁぁぁぁあ」

イタリア戦争は神聖ローマニア帝国の勝利となった。
だが、敗北したフランソワ王国は神聖ローマニア帝国のことを憎んだ。

一方そのころイスタンブール
「わが君、フランソワ王国が神聖ローマニア帝国に敗れたという情報が、」
「そうか、そうか、時代は荒れ狂う。そしてその中で各国の王が自分たちの願望を叶うために戦い続ける。よいではないか、素晴らしい、やはり世界は美しい!!」
「わが君、我らはこれからどうしていけばよろしいのですか」
「まだだ。まだ動くべきではない。この世界、一寸先はとてつもなく暗い闇のようにわからないものだ。我々はこの無残で、残酷で、美しい世界で生き残るためにも、情勢を見極めなければならない。」
そういうと男は王座の横に飾られたいた剣を抜き上に振り上げた。
「われらイェニチェリ帝国は永遠なり。いつか西大陸、いや全世界が我らのものとなるだろう!!。」
「「万歳!!万歳!!アッラーに栄光あれぇ!!」」

外交改革

イタリア戦争終結後、内務省長官の机の上には今までにないほどの大量の報告書が積み上げられていた。どうやらフランソワ王国と中東のイェニチェリ帝国が同盟を結ぼうとしているという情報があるからである。正確な情報をつかむために調査員の派遣を増加している。

応接の間

今日は、文官　武官の両者全員が集まりこれからの帝国の生末を考えていく会議が行われた。

「それでは。会議を始めようと思います。まずヴァレンシュタイン将軍から報告があります。」

そういわれ席を立ったのは帝国随一の勇将であり、先代皇帝から仕えた来たヴァレンシュタイン将軍である。

「現在わが帝国は西をフランソワ王国、東をイェニチェリ帝国という二つの敵を抱えております。またハイドリヒ長官の情報によれば、この二国が同盟を結ぶ可能性が出て

きているという情報も入ってきております。このままではわが帝国は二正面作戦を強いられ、ただでさえ財政難にも関わらず軍備を増強し続けねばなりません。これについての外交的解決をお願いしたい。以上である。」

次に席を立ったのは外務大臣であるノイラート大臣である。

「外務大臣として申し上げます。確かに帝国は、現在強大な二国に挟まれております。外務省はこの状況を打開する策を提案いたします。東の国ツァーリ公国との同盟を提案いたします。いかがですか、陛下」

「うむ。われも其の意見には賛成である。皆はどうか?」

「賛成です。」「賛成ですな」「異議なし」

「ありがとうございます。では早速実行に移します。」

次に席を立ったのは経済大臣であるヨハネス大臣である。

「経済大臣として申し上げます。現在帝国は、先代皇帝の領土拡大政策による財政難から脱却できておらず、それどころか悪化するばかりでございます。」

ヨハネス大臣がそういうとブランデンブルク大臣の目が鋭く光る。

「このままでは、帝国の経済は破綻し、滅亡してしまいます。ゆえにいままでの税制をかえ、貴族からも税をとるように税制を変更したい。いかがですか」

すぐさまブランデンブルク大臣が発言した。

「私は反対ですな。ヨハネス大臣、そんなことをすれば、貴族たちが反乱を起こすかもしれませんぞ。ハイドリヒ長官のおかげでプロテスタントどもがようやく落ち着いたというのに新たに火種を作るおつもりですか」

「ですが、ブランデンブルク大臣、そうでもしない限り帝国の財政難は解決されません。先代皇帝が販売した贖宥所の利益もほとんどが行方不明。このままでは、帝国は崩壊してしまいますぞ！」

みなが鎮まる。ヨハネス大臣の言い分はもっともであり、帝国の財政難は先代皇帝の時代よりも悪化していた。貴族から税をとる以外に解決策がなく、苦しい決断を帝国は迫られた。

「私は賛成です。」

「ハイドリヒ長官、」

「帝国の財政難解決のためには致し方無い。反乱分子はつぶせばいい。そのための内務省だ。また貴族の中にも市民から金を巻き上げている不届きものも何人か存在する。その者たちを見せしめにつるし上げれば問題なかろう。」

ハイドリヒの提案に誰も反対しなかった、なぜハイドリヒには反対しないのか。彼はそうやって実績を残してきたからだ、反逆者には、一人残らず処罰する。それが彼のやり方であり、ラインハルト・ハイドリヒという男だとみな知っていたからだ。

「マ、マドリード王国に経済援助はもらえないのか?先代皇帝の弟君のフィリペ殿なら助けてくれ、、「不可能です。」」

「マドリード王国は現在プロテスタントどもの反乱に手を焼いています。帝国を援助する余裕はないでしょう。」

最終的にカール5世は新しい税制を認め、会議は終了した。

その後、西大陸に衝撃が走った。キリスト教の国であるフランソワ王国とイスラム教であるイェニチェリ帝国が同盟を結んだのだ。神聖ローマニア帝国はこれに対抗するためツァーリ公国との同盟を宣言した。

応接の間

現在ツァーリ公国の王ピョートル一世がカール5世に面会を求めにやってきた。

「陛下、こちらがピョートル王でございます。」

「こんにち、「おぉ!!これはこれは皇帝陛下、元気そうで何よりです。あなた様の父上とはよく戦場でよく戦いました。いやはや懐かしい」

忘れていたがこのピョートル王は西大陸では噂になっている王で通称「変人の大王」といわれるほど有名なのだ。

「あぁ、そ、そうだな」

カール5世は苦笑いをしながら、接していた。確かに普通の人にとってこの方はインパクトがありすぎる。

「ん?んんん?（　；　、・ω・、）ンンン?、、!!ハイドリヒではないか!!久しいのぉハハハハハハ」

「、、お久しぶりです。ピョートル王」

「おいおい、そんな固くなるな、まさかあれかまだ怒ってるのか、あの時のことを」

「ピョートル王、ハイドリヒとは面識が終わりで??」

「えぇ皇帝陛下。彼とは先代皇帝陛下が我が国にいらしたときに会いましてな。その時彼に冷水をかけたんですよ。（?▽?；）ハッハッハいやはや懐かしい」

「そ、それはそれは」

そうこの話の通りハイドリヒは昔先代皇帝とともにツァーリ公国に出向いたことがありその時、ハイドリヒはピョートル王にいきなり冷水をかけられたという思い出がある。

その時先代皇帝が「うちのものが無礼をしたか?」と聞いたところ

「あのものはいつも真顔なので、違う顔が見たかった（*、ω、*）」

といったそうだ。先代皇帝はその気質を気に入り彼を好敵手とみとめた。

「ご、ごほん。ところで、ピョートル王、そろそろ本題に、、」

「おぉ。そうでしたな。吾輩が今日訪ねたのは同盟の件でございます。」
ピョートル王は先ほどまでのへらへらした顔から一変し、一国の王の顔へと変化した。ここが彼の侮れない理由である。
「我が国も不凍港の獲得のためにイェニチェリ帝国と争いを続けており、ちょうど仲間が欲しかったところでありました。」
「!!そ、それでは、」
「えぇ。今回の同盟の件受けさせていただきます。」
「あ、ありがたい。これからもよろしく頼みます。」
「こちらこそ。仲良くしていきましょうぞ（*´ω`*）」

こうしてフランソワ王国とイェニチェリ帝国の同盟に対抗し、神聖ローマニア帝国とツァーリ公国は同盟を締結した。

ユトレヒト同盟

神聖ローマニア帝国内務省

内務省長官であるラインハルト・ハイドリヒは大量の名前の載った報告書を眺めていた。帝国会議により、皇帝陛下の名の元新たな税制を取り入れたことにより、貴族からの反発が増加。何人かの貴族は反乱の準備をしているなどの報告も来ている。いつもならすぐさまゲシュタポを招集し、反乱分子の摘発に向かうところだが、今回はできない状況にいた。

数日前、

「長官、皇帝陛下がお呼びです。」

「わかった。」

内務省とヨハネス大臣率いる税務省の共同により帝国は先代皇帝が残していった問題を少しずつ解決していたが、それは帝国だけであり、先代皇帝の弟君であるフィリペ２世が治めるマドリード王国は財政難への脱却ができないでいた。

ハイドリヒが応接の間に着くと奥の玉座に座っているカール５世は待ちわびたかの

ような笑顔でハイドリヒを見た。
「おぉ、ハイドリヒ。すまんな急に呼びつけて。」
「いいえ、お気になさらず。それで何用でしょうか?」
「うむ。そなたも耳に入っとると思うが、マドリード王国の事じゃ。」
マドリード王国の国王フィリペ2世は財政難を脱却するために当時栄えていた自国領のネーデルランドに対し重い課税をしいた。そのことに不満を持った者たちがオラニエ公ウィレムを筆頭に反乱を起こしたのだ。
「ええ、聞いております。ネーデルランドで大規模な反乱が発生したとか、しかもただの農民たちではなく、ネーデルランドの商業力を使い武器などを仕入れているという情報が入っております。」
「うむ。それで先日フィリペ殿から援軍をたのまれたのじゃ。わたしの叔父上の頼みなので断れなくてな、ただ将軍たちはツァーリ公国の援軍などで手が空いておらん。そこで、ハイドリヒの親衛隊を援軍に出してほしいのだが、だめか?」
「承りました。準備ができ次第ネーデルランドへ出兵いたします。」
このため帝国内部の反乱分子を排除する余裕がなく、現在放置状態となっている。
「まったく。ようやく財政難から抜け出したというのに、」

「長官。親衛隊の準備ができました。」
「よろしい。すぐに出発だ。」

神聖ローマニア帝国皇帝親衛隊ネーデルランド派兵部隊
総員２万５千
銃器、騎馬、などを多数配備
率いる将軍　ラインハルト・ハイドリヒ内務省長官及び親衛隊大将

黒い服一式のその軍勢はどくろの旗を掲げ、ネーデルランドへ向けて出発した。

ネーデルランド
現在ネーデルランドでは、マドリード王国率いる部隊は南部１０州を反乱を鎮圧し、北部７州の鎮圧に向かっていたが、北部７州はユトレヒト同盟を結び、対抗していました
「死ね!!マドリード王国のくそども!!」
武器をとれるものは全員が団結して戦い、いろんなところに潜みながら戦いを続けて

いた。
「くそっ、北部のやつら手ごわい。」
「まったくだ。しかも地の利は奴らにある。俺たちにどうたたかえっていうんだ。」
マドリード軍も長い戦争で疲れ切っており兵の脱走相次いでいた。そんな中、、
「おい、あの旗はなんだ?」
「マドリードのくそ野郎どもまた援軍をよんだのか、」
「いや、、あれはマドリード王国の軍じゃない、、どくろだ」
「どくろ?どくろってまさかあれか?」
「ローマニア帝国のやつらだ、、ローマニア帝国のどくろの軍隊だ!!!」

「長官。どうやらあの町に立てこもっているそうです。」
「ほう。確かにあんなところに立てこもられたら、苦戦するな、」
馬上から町を眺める彼の姿は、立てこもっている市民たちからも見えていた。その姿はまるで地獄から悪魔を率いてやってきたサタンのように市民たちからは映った。
「長官、いかがなさいますか。」
「いつも通り、一人も残さず殺せ。反乱分子は生かしておく必要はない。」
「はっ、では、あれを使いますかな?」

「そうだな。砲撃準備！」

ハイドリヒが叫んだ瞬間、後ろで待機していた親衛隊が馬車から大砲の部品をひとつづつ取り出し組み立てを始めた。普通の兵士ならかなりの時間がかかるところだが、ハイドリヒが育て、鍛え上げた兵士はあっという間に大砲を組み立て終えていた。

「砲撃準備完了！」

「、、砲撃はじめ!!」

親衛隊砲兵による一斉砲撃が開始された砲撃の前に建物などの遮蔽物は意味がなく、砲弾が当たるたびに、建物は崩れ、中に潜んでいた市民たちは町から逃げ出さなければならなくなった。が、

「隊長、奴ら砲撃におびえてでてきましたぜ。」

「長官の計画通りだな、打ち方用意。」

砲弾から逃れるために、町から出てきた市民たちを待ち受けていたのは、黒い服を身にまとい、死の象徴であるどくろの旗を掲げていた親衛隊たちが銃を構え、待っていた。

「なっ！そん「うてぇぇぇい!!」

砲撃とともに鳴り響く銃声。マドリード王国軍を何日も足止めしていた勇敢な市民たちは、たった一日で屍へと変わった。

ハイドリヒ率いる親衛隊はその後オラニエ公が立てこもるアムステルダムへ進撃。

ここでも無慈悲な砲撃と銃声の音が鳴り響いた。
指導者のオラニエ公ウィレムは首を切り落とされた。

奴らは人ではない。あんなに感情もなく、ただ命令を完遂するために人を殺すのを何とも思わない奴らは人ではない。悪魔だ。悪魔以外ありえない。

「あるマドリード兵の日記」

帝国の歴史

ネーデルラントの反乱軍を鎮圧したハイドリヒは、マドリード王国のテントに足を運んでいた。

「国王陛下。神聖ローマニア帝国のものが面会を求めております。」

テントの外にいた兵士がテントの中にいる国王に報告していく。

「馬鹿者。我が親族の者を待たせるなど我が名が廃る。はやくお通しせんか。」

ハイドリヒがテントの中に入ると金色の鎧を身にまとう男がいた。

彼こそがマドリード王国現国王カール４世の弟、現皇帝カール５世の叔父にあたる人物であるフェリペ２世本人である。

「ん？おぉ。帝国からの援軍は一体誰かと思えばそなただったのかハイドリヒ」

「国王陛下。お元気そうでなによりです。マドリードの方はいかがですか？」

「はぁ。まぁぼちぼちじゃな。全く新世界からの貿易品の利益を銀行に抑えられてわしも贅沢できんくて苦労しておる。ハイドリヒお主一度我が国に来てなんとかしてくれんかね」

「ご冗談を。国王陛下。新しい宮殿を作るご様子、贅沢できないなど誠ですかな？」

「相変わらず耳が早いなお主は。まぁそんぐらいの力がないとあの政変には生きていけれんわな。ハハッ」

ここで神聖ローマニア帝国の歴史を少しだけ説明しよう。神聖ローマニア帝国はオットー一世戴冠当時皇帝位はローマ教会が話し合って次期皇帝を決定すると言う形式を取っていた。これは皇帝の権力の世襲化による教会権力の弱体化を防ぐためのものであった。その決定権を持っていたのが十二選帝侯と呼ばれる者たちである。が、その体制は前皇帝カール４世の時に崩壊した。また神聖ローマニア帝国という強大な国とは裏腹に実際は各諸侯達が自分の領地を持ち好き勝手に政治を行い必要な時だけ皇帝の名を聞くと言ういわば軽い内部分裂を起こしていた。カール４世戴冠当時その戴冠に多くの諸侯が反対していたのである。理由は簡単。カール４世は神聖ローマニア帝国の再統合『帝国改革』を掲げていたからだ。自分達の権利を剥奪する可能性があるものが皇帝になるなど言語道断であった。しかしこの時カール４世に使えていた二人の男達によりカール４世は皇帝に即位。改革を強行していくこととなる。その男たちが【ラインハルト・ハイドリヒ】【ブランデンブルク辺境伯】この二人である。ブランデンブルク辺境伯はカール４世を皇帝にすることにより教育役として使えていた幼いカール５世を皇帝にしてやろうと考えこの改革に参加した。それをうまく活用したのがハイドリヒである。彼は選帝侯とコネのあるブランデンブルク辺境伯を使いカール

４世を皇帝に即位させ、即位に反対する諸侯の引き締めを開始した。まず彼は帝国の諸侯の各領土に内務省管轄の部署を置く事を提案。当初の目的は治安維持や反乱軍の対処などを諸侯に変わり帝国が受け持つと言う目的で建てられた。反乱軍対処や治安維持でかかる費用を抑える事ができその浮いた資金を自分たちのために使うことができると考えた諸侯たちはこの提案を承諾。即座に各領土に設置され、内務省主導による締めつけが開始された。各諸侯の財政管理を調査させ、全ての収入額を調べさせ、必要以上の収入がある場合内務省が差し押さえると言う強行を発動。この対応に各諸侯は反発。皇帝に抗議した。

「皇帝陛下！今回の内務省の行動は目にあまりますぞ!!今すぐに中止してもらいたい！まさか我々諸侯と結んだ『マクシミリアン条約』を破るおつもりですか！」

マクシミリアン条約。オットー一世が増長する諸侯を抑えるために結んだ条約である。諸侯は皇帝の命に従う代わりに皇帝は諸侯への干渉全てを禁ずる。というものである。

「このカール４世其方達に抗議されるような事は行なっていないと思うが？」

「なんですと？まさか陛下は内務省が行ってることに一切関与してないと？」

「その通りだ」　カール４世の言葉の後各諸侯達は一斉に大声をあげ皇帝を非難した。

「嘘つきめが!!」「何が知らないだ!!本当のことを言え!!」

「仮に!!仮に私が知っていたとしても私はこの件について口を出すことはできない。なぜならこの件はそなたらと内務省が結んだではないか」

そうこの内務省の提案書を結んだのは諸侯と内務省であって諸侯と皇帝で結ばれたものではない。そしてその二つの中に何が起ころうと皇帝はマクシミリアン条約によって口を出せない故に止めれない。という事である。まぁこのように内務省。ラインハルト率いる内務省と親衛隊により反発する諸侯を見せしめに滅ぼしその領土を帝国領（皇帝領）としたしかも見せしめとして潰した諸侯の殆どが金山銀山を領内に所有する諸侯であった。これにより諸侯の力は激減。皇帝の力は増大した。また皇帝の権力が増大してもブランデンブルク辺境伯の根回しによりローマ教会からの批判などはなかった。そして今に至る、

「私は特に何もしておりませんぞ国王陛下。」

「まぁええじゃろう。此度の援軍感謝すると皇帝陛下に伝えてくれ。また本国の宮廷建設がひと段落済んだら訪問するともな。」

「かしこまりました。それでは失礼します。」

ハイドリヒが出て行った後、一人の将軍がフェリペ２世に問いかけた。

「陛下。あの者は文官のはず。どうして此度の援軍にかのようなものが、」

「奴は文官だの武官などではない。奴は番人だ。帝国を害する敵を殲滅するためにいる

帝国の番人なのさ」

神聖ローマニア帝国　ウィーン

カール５世は執務室で皇帝としての仕事をこなしていた。

「ええっとこの書類がこれで。商人たちとの書類が、、ええっとこれか」

「陛下、そろそろハンガリー王国のブタペストに親善訪問するお時間です」

「あぁ、そうだったなすぐ行く。」

ハンガリーの首都ブタペスト、、のちにこの首都は戦場となるのだが、今は誰も知らない